

ステアリング・メンバ会議における提案・提言

○日時 平成25年10月29日(火) 15:00~17:00

○場所 秋田県立大学 秋田キャンパス 管理棟2F会議室

○出席者 11名(県1名、企業関係者6名、大学関係者3名、コンソーシアム1名)

○協議事項

フリーディスカッション

テーマ「地域と大学の共存を考えよう」

- ・人材育成や企業の技術課題について
- ・県内に若い人が残れるようにするためにはどうすればよいか

【会社での人材育成】

- ・会社の人材育成として、これまでやっていた技術以外に、経験したことがなかった技術にも挑戦させるようにしている。
- ・中小企業は従業員と社長との距離が非常に近く、会社の将来像などの話もできるので職場で刺激を受けることができる。そういうことが浸透していけば会社は良くなる。
- ・人材という観点で、一つは、事務屋の経営系。そして技術系の人間。技術も分かって、会社のポジショニングも分かって、新しいテーマを与えたら白紙から企画をしてそれを商品・サービスまで持って行ける能力のある人。もう一つは、着実に技術と資格を取っていき、現場をこなしてくれる人。
- ・外から新しい情報をどんどん仕入れ、組み合わせを変えることによって、会社の生産性が飛躍的に上げるとか、新たな設計を提案するのが、食品会社で求めている工学系の人材。

【大学での人材育成】

- ・本荘キャンパスの学生と話していると、民間出身の先生も多く、いろんなテーマを学生に発表させているので、学生は自分の意見を言い、話すというのがうまい。
- ・企業が求めるリーダーを社会に送る場合、専門知識もさりながら、コミュニケーション能力を修得した学生とただ教えられてきた学生に大きな差が出てきている。20代、30代で会社から与えられるチャンスも変わってくる。
- ・リーダーを育て社会に送り込むために、大学はこれからどうしていかなければならないのか考えていかなければならない。
- ・今大学は、ディプロマポリシー、卒業要件。単位を何単位取ったというのではなく、この人は世の中に出たときに、課題が与えられたときに、課題を分析して解決していくプロセスができるかどうか、というように変えようとしている。
- ・それを実現するためのカリキュラムは、どうあるべきか。そのカリキュラムは中で議論をさせていくような授業をしていかなければならない。

・大学がどんどん変わってくると、「白紙から描ける人」がたくさん育ってくる。そういう大学には非常に魅力がある。

【大学と企業との連携】

・学生が、ある段階のときに企業へ行って、そこで教育を受けさせてもらうことについては、可能な場合もあるが、毎日変わる現場を持っている企業では困難だ。

・県北にいと大学のインターンシップはまずほとんど来ない。今がんばっているのがポリテクカレッジ秋田（秋田職業能力開発短期大学校）。

・地元に戻ってきたいと思っている技術者はいるが、三次元 CAD の技術者を採用する会社はない。

・三次元 CAD の場合、競合相手は国内よりも海外。中国の人たちは、日本で一週間かかるのを2日程度で設計を作る。しかし、品質的なところまで見て設計できるかと言えば、まだ難しい。こちらでもスピード感というのを意識してやれば、全国的に仕事はある。

ただし、高品質なレベルのものを提供できるようにするためにも、賃金は低くはしない方がよい。また、仕様書を渡された段階で、自分の意見を言えるような人に育てられれば、依頼先から認めてもらえるようになる。

・地元企業の PR の場がないので、県主催の産業展で実施するとか、大学祭で企業も出展させてもらうという方法を提案したい。

・以前、県立大学で社会人大学院生を募集していたことがあり、会社で参加したことがある。しかし、優秀な人材を出すために、仕事が集中する中で、学校で授業を受けて、論文を書くということに時間的な余裕がなく、1年で止めた。

【大学と企業との共同研究】

・国の補助金制度のサポート・インダストリアル事業（平成19年）でプレス機械を作った。自動車部品メーカーの人や県立大学、岩手大学の先生にも入ってもらった。事業は3年かかったが、その研究によって得たものは大きく、その後のプレス機械の成果に生かされている。

・国の制度の枠の中に、学生を入れることができれば、共同研究は非常にやりやすい。単独の研究事業で学生を入れる場合、労働関係が成立するのか、労災が起こったらどうするのかという問題が必ず出てくる。賃金を払うとすれば、どういうことで払うのかという問題も出てきて難しい。

【企業との協働研究講座】

・社会人学生として、学位取得が目的ではなく、授業を受けさせて、一年間モデルに作り込むようにしてはどうか。

・社会人になったときに、技術力を支えるコミュニケーション能力が全くないものにならない。我々メンバから負担にならないように人を出して、モデルケース授業みたいなもの

のを指導させて、何かゼロから創り上げてはどうか。

- ・そのときは、人選びからこういうのは誰に頼んだらいいのかとか、自分で考えさせて、アドバイスして、自分で引っ張って呼んでくるようなそういうカリキュラムを一つ組んでもらえれば。手間はかかるけど、数年経てば何人かはその中から優秀な人が出てくるかもしれない。

- ・モデル授業のテーマについては、会社からでもいいし、大学のケーススタディとして、未来型の変速機を作ってみようということもある。参加メンバについては、学生に考えさせて、企業のメンバはこういう人が必要となれば、我々コアメンバで会社から一人アドバイザー的なポジションで1ヶ月に1回出す。

- ・実際の製作課程の中で技術者が社会的接触をして、1年かけてものを一つ創り上げるというケースワークの経験知を企業は欲しいと思う。

- ・例えば、若手の優秀な人材をそこに入れ、自分がやっている方法論が果たして正しいのか不安を抱えている場合、大学の指導教官から方法論を教えてもらえれば、ほっとする。そういう意味では人材育成のメリットがあるので社員を出しやすいと思う。

【食品加工の改善研究】

- ・学生が工場の現場でずっと作業を観察できれば、経営工学の作業改善や生産性について理解できる。欠陥場所とか、効率を2倍にするにはどうしたらよいかとか、ずっと張り付いて見ていられる。従業員には余裕がないのでそれができない。

- ・先生のフットワークも良くなければだめだ。

- ・県でも6次産業という言葉があるが、食品加工するところがない、それなりの設備もない。どういうものを作ればいいのか、われわれには分からない。

- ・県は6次産業と盛んに言っているがさっぱり進まない。それは加工がないため。加工が何でできないかと言えば、品質管理と衛生管理が分からないから。表示の知識もなかった。また、長持ちさせるための衛生のポイントなど基礎的なことを知らない。

- ・この辺をきっちり教えて行くなり、経験させるなりして行かないといつまで経っても秋田県は食品加工ができない。

- ・どこに売れ筋があって、そこをどういう商品にしたら売れてくるのか。そうすると、食品加工機械を一部変えないと勝てない。例えば同じ焼く機械でも、焼き方を変えることで大幅な差別化ができて市場に出せる。

- ・大学で教育としてやるには、例えば秋田プリマ食品で改善したい機械があったとすると、それを学生を入れてみんなで「改善」をやってみてはどうか。

【カレッジプラザでの研究講座の開設】

- ・カレッジプラザで研究事業をやれば人が集まりやすい。

- ・おもしろいものができるとすれば、土曜日でも日曜日でも来るといふ人はいるのではないか。

- ・研究開発要員というのを置いているので、そこに持って行ければ、また次も育てられる。

- ・食品系、メーカー系で、あるテーマをセットして、土日そこでやるというのはある。

- ・モノが見えて目標が明確になっている方がやりやすい。会社のプロジェクトもそうだ。
- ・イチゴのジャムを作る装置をものすごく効率的なものへ向ければ、工学系が入れる。

【工業会の一体化とスーパー連携大学院のネットワークの活用】

・工業会の一本化ができれば、いろいろな業界の人とつながりができ、それに乗っかる企業が必ず出てくると思う。そこに高専や県立大学も参加すれば、ものづくりの関連でものすごいパワーが出てくるはず。

・飯田電子工業会では、若い人は外の企業とやりとりをしていかないと、新しいものを作ろうという意欲や融合の知恵は全く生まれないと考え、スーパー連携大学院のネットワークをうまく利用して、いろいろな新しい情報や人材交流など知恵を持ってきて、そこで若手の経営者たちに新規事業を作ってもらいたいと考えている。

【まとめ】

コアメンバからは、企業側からのニーズに合ったカリキュラム編成をしなければ、企業が本当に求める人材（白紙から描ける人）は多く育たないし、大学と企業の連携は進まない。また、作業改善や生産性の面などでも大学が企業に貢献できる分野があり、大学教員のフットワークの軽さも求められている。さらに、企業と大学が協働で作業ができるサテライトオフィスの整備もカレッジプラザに設けるべきであるという意見もあった。

統括コーディネーターから「飯田電子工業会」との連携の話題提供があり、同会ではスーパー連携大学院のネットワークをうまく利用し、新規事業などにつながる取り組みを進める予定であることについて紹介があった。最後に企業との接点で、新しい事業を立ち上げる取り組みについての議論を定期的に行っていくことを確認した。